



きゅうり(半促成)定植前後の管理

令和6年4月11日

JA ぶくしま未来伊達地区／伊達農業普及所

◎ 向こう1ヶ月の天候の見通し ◎

(東北地方：令和6年4月4日仙台管区气象台発表)

- ・天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
- ・期間の前半を中心に暖かい空気が流れ込みやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。



栽培のポイント

- 1 温度・湿度が急激に変化しないように管理する。
- 2 ベッド内の水分、地温を確保する。
※定植前に水分を確保する。冷水かん水による地温低下に注意。
- 3 病害虫対策を徹底する。
※病害予防防除、アブラムシ類等の飛び込み防止や薬剤防除の実施。

1 ほ場準備

(1) 除草

害虫の飛び込み防止のため、あらかじめほ場内及びほ場周辺は除草しておく。
育苗中や定植後にハウス周辺を除草すると、ハウスへの飛び込みを誘発して逆に害虫の多発につながることもあるので、除草はきゅうり栽培前に行う。

(2) ホモプシス根腐病、ネコブセンチュウ対策

前作終了時に根部の偽子座によりホモプシス根腐病と診断され、萎れ株が1割以上発生していた場合は、ほ場移転か土壌消毒(マルチ畦内処理)を実施する。

転炉スラグによる発病抑制は、発生株率10%未満、根の褐変が表面積の3割以下でないと期待できない。また、土壌条件により投入量の変動するため、転炉スラグによる対策を検討している場合は、必ず早めに普及所、各営農センターへ相談する。

ネコブセンチュウ被害が大きい場合は、土壌消毒や殺センチュウ剤による対策を実施する。

土壌消毒の消毒期間(地温にもよるが目安は1か月)や転炉スラグ投入量の算定に時間を要する(約1週間前後)ため、定植まで余裕のあるスケジュールを立てる。

(3) 完熟たい肥、基肥の施用

土壌分析結果に基づき、適正量を施肥する。定植の2週間前までに行う。

(4) 水分、地温の確保

耕耘は暖かい日に行い、地温確保に努める。定植2週間前に十分にかん水し(冷水かん水の場合、地温が確保できるよう特に注意する)、ハウス被覆とマルチをする。ベッド内の地温は18℃以上を確保し、水分を十分に畦全体になじませておく。

2 購入苗の管理（到着～定植前）・・・すぐに定植しないこと!

(1) 箱から出して並べる

苗到着後、ポット内の水分や根回りを確認のうえ、軟弱徒長防止のため、葉が重ならない程度にポットの間隔をあけて置く。

(2) かん水（くみ置き水を使用し、冷水をかん水しないようにする!）

ポットの土は乾燥状態になっていることが多いため、到着後すぐに必ずかん水する。薄い液肥（トミー液肥 500 倍液等）や発根促進剤を使用すると、定植後の活着が良くなる。

(3) 殺虫剤施用（最新の J A 野菜病虫害防除基準を参照する）

育苗期後半から使用できる殺虫剤を施用する（アブラムシ類対策）。

(4) 温度・湿度の管理

乾燥と低温（特に急な温湿度の変化）に注意し、日中の強日射や夜間の冷氣への対策を行う。3～5日程度管理し、ポット内に根が回ってきたら定植する。

3 定植のポイント

(1) 定植のタイミング

スムーズに活着するよう、晴れた暖かい日の午前中に定植する。

(2) 定植の方法

根鉢と植穴に“すきま”ができないように植付ける。なお、接ぎ木苗は自根発生防止のため、鉢土が畝よりも 1 cm 程度高くなるように定植する。（植え穴を深くあけすぎない）

定植後は速やかに株元手かん水を行い、ポット土とほ場の土をなじませる。使用する水はくみ置きするなどして水温を上げておく。

(3) 定植後の株元かん水

定植から 1 週間程度（活着するまで）は、ぬるめの水（地温を下げない温度）で株元かん水を行う。

特に根鉢が乾きやすいので鉢周りを乾燥させないようにするとともに、ベツト肩にもかん水して畝全体の水分を確保する。

(4) 定植後 1 週間の温度管理

活着を促進するため、ハウス内はやや高めの温度で多湿状態に保つ。夜温 15℃、日中 30℃（曇天、雨天時は 20℃）、湿度 80%を目安とする。

◎活着期の生育診断

- ・展開葉が日中でも萎れない。
- ・定植時に展開していた葉が大きくなり、葉色が濃く、光沢が出てきた。
- ・莖が太くなりつつあり、特に成長点の莖が太い。
- ・力強い巻きひげ（緑色で基部から先端まで太い）が出てきている。

⇒草勢が弱い場合：畝全体の水分確保、ポット土と圃場の土のなじみを確認。

株元かん水、アミノ酸入り液肥や発根促進剤の施用。

4 活着から本葉12～13枚まで

(1) 温度管理

午前中	25～30℃	暑くなりそうなときは、湿度確保のためサイド、カーテンの順に開けて温度を調整する。 29～30℃になったら換気する。
午後	23～25℃	23℃になったら、サイドを閉める。 20℃でカーテンも閉める。
夕方	14～17℃	夕方、冷え込む日は、早めにカーテンを閉めるなどして気温を確保する。
夜間	12℃	

※ 急な換気（湿度低下）による芯やけや葉やけに注意！

ハウス内が高温になる前の換気開始を心がける。ハウス内が高温になってしまった場合は、まず通路散水や葉への軽い散水を行って湿度を高め、きゅうりに直接風が当たらないように風下側から少しだけ換気を始め、徐々に開放幅を広げる。

(2) 低段の着果管理・整枝

活着後（本葉10～12枚ころ）に、ベッド上30～40cm以下（節数ではなく高さで判断）の側枝（子づる）を2回に分けて除去する。雌花は、小さいうちにその都度摘除する。

(3) 追肥

追肥開始のタイミングは、「主枝に最初に着果させる実」の開花頃から行う。追肥量は、最初は1回あたり窒素成分0.5 kg/10a程度（液肥）の少量追肥に努める。

その後、草勢に応じて追肥量を増やしていく（1回あたり窒素成分0.5～1.0 kg/10a程度（液肥）を5～10日間隔で施用）。

◎開花期の生育診断

- ・花弁は大きく鮮やかな黄色。ガクは緑色で大きい。
 - ・雌花が心（生長点）から50cm程度（葉数5～6枚程度）の位置で開花。
- ⇒草勢が弱い場合：1～2果上位節まで摘果を行い、主枝の着果開始を遅らせる。

◎農薬は登録内容に従って適切に使用し、使用後はすぐ防除日誌に記帳しましょう。補助簿を確認し、混合剤の成分の使用回数にも十分注意してください。

◎農薬使用前にも防除日誌を確認し、作用機構が同じ農薬を続けて使用しないようにしましょう。

◎春の農作業安全運動期間中です。春は農作業事故が発生しやすいので、作業前の点検をしっかりと行い事故を未然に防ぎましょう。

◎収入保険などを活用し、農業経営の安定を図りましょう。

◎地域計画の作成や農地中間管理事業等を活用し、地域の農地を有効活用しましょう。